

第一章 佐々成政の越中支配

第一節 成政の越中入部

一、織田信長の北陸進攻

越前攻略

『富山県史』通史編で扱う近世は佐々成政の越中入部以後を対象とするが、少しくそれまでの信長の北陸進攻の足跡をたどってみよう。

織田信長は足利將軍義昭を京から追討するために元龜四年（一五七三）三月に岐阜を出発し、京都を焼き払い、二条城を包囲したので、義昭は信長に降伏したが、七月には榎島城に籠って再び抗戦した。しかし義昭は子を入質として降伏して、ここに室町幕府が消滅したことになる。それから信長の反信長勢力への討伐が続く。元龜は天正と改元され、信長は八月に近江へ入り、浅井氏の小谷城を攻める。越前朝倉義景は浅井氏からの知らせで救援にかけつけ、木之本に陣をひいたが、離反者が出て退去せざるをえず、信長は朝倉勢に追い討ちをかけ、越前へ乱入して一乗谷を攻めた。義景は一乗谷をすてて自刃し、ここに越前朝倉氏が滅亡し、織田氏の北陸進攻の基地ができた。八月二十日のことである。更に二十七日には浅井久政・長政父子も自刃している。朝倉氏滅亡後、信長は前波吉継を郡代（守護代）として置いていた。北ノ庄には津田元秀・木下祐久・明智光秀の三人衆を配し、また富田長秀は府中城主に任じられた。前波吉継は信長の上洛に従い、桂田播磨守長俊の名をもらっている。しかし、この桂田・富田はともに旧朝倉氏の家臣でありながら信長方にくみしたもので、互いの対立関係が一揆側の攻撃材料となった。天正二年（一五七四）正月、一揆はまず富田とくんで桂田を攻撃し、北ノ庄三人衆は京へ逃げた。信長は越前が一揆によって席捲され

本願寺の支配になったことを知りながらも動かなかつた。そして羽柴秀吉が敦賀へ派遣されている。武田勝頼の明智城攻め、本願寺の蜂起、伊勢長島の一揆、伊丹親興の反乱などのために越前へは動けなかつたのである。しかし、朝倉残党、本願寺の反対勢力の専修寺派坊主に招誘の手がさしのべてあつた。明けて天正三年（一五七五）足利義昭の幕府再建の誘いに応じて、武田勝頼は三河の長篠城を包囲し、越前でも一向衆徒が下間頼照・杉浦宍岐・七里頼周を中心として蜂起して、一国を支配下に収めるような勢いであつた。信長はまず五月二十一日に長篠の戦いで武田氏に致命的な打撃を与え、八月には越前へ進攻し、一向衆徒を攻め、敦賀より十六日に府中に入り、西光寺・下間和泉などを討つた。頭領下間頼照は高田派称名寺に討ちとられた。九月二日に信長は北ノ庄に入り、越前を分封し、越前八郡は柴田勝家、大野郡の三分の二は金森長近、三分の一は原政茂、敦賀郡は武藤舜秀に給し、府中には前田利家・佐々成政・不破光治の三人衆を勝家への目付として今立・南条二郡を与えて、越前一国支配を強化した。この三人衆の知行形態、あるいは国割で八郡を与えられた柴田勝家と三人衆との関係も不明なことが多く、また、信長が発給したといわれる「越前国掟」（信長少記巻八）の史料の信頼性の問題もでてゐる。信長はこの十二月に本願寺と講和し、誓詞を交えてゐる。このおり信長勢の羽柴秀吉・惟任光秀らは加賀に進攻し、能美・江沼両郡を占領した。

本願寺との和陸と加賀攻め

本願寺頭如は天正四年（一五七六）四月に信長に対して拳兵し、五月には上杉謙信と和約、そして十一月には下間頼純を加賀へ遣わして、門徒を統制させてゐる。一方、信長は天正五年八月には謙信への対処のために、柴田勝家・羽柴秀吉を加賀へ派遣してゐる。しかし、秀吉は勝家と争ひ兵を引きあげて信長より勘当をうけている。九月十五日に謙信は七尾城を攻略して加賀湊川まで進攻し、勝家は越前へ撤退してゐる。しかし、謙信は天正六年三月十三日に病死し、ここに信長方の加賀・能登・越中への進攻が始まることになる。ところで、本願寺と信長との和平交渉は、天正七年末より始まり、翌年三月十七日に信長は講和条件を示し、血判の

誓約書をもって条件を履行することを誓った。その一つに「加賀は本願寺が大坂退城の後に裏切らなければ返す」(本願寺文書)という条件があったが、天正八年閏三月九日に柴田勝家は加賀へ攻め入り、宮腰に陣取り、一揆は野々市に陣どったが、柴田勢は野々市の一揆を破り北上し、尾山御坊を陥落させ、佐久間盛政をその鎮将として守らせた。柴田勢は白山麓、能登境まで進入し、河北郡木越光徳寺を陥れ、能登末森の土肥但馬守を攻め、有力な国人などが攻め滅ぼされた。一方、大坂では信長と本願寺との和平が成立し、閏三月十一日信長は加賀の本願寺寺領を認める朱印状を出し、柴田勢の加賀進攻を停止させた。佐久間盛政の尾山御坊占拠によって、一揆はその拠点を失い、加賀は信長の手にはいりつつあった。しかし、こざりあいがあったようで、六月に手取川・山内口の戦いがあり、鈴木出羽守の山内衆が信長勢を討ちとっており、波々伯部秀次は上杉景勝の出陣があれば、越中・能登・加賀まで上杉の領国になるうと注進している。顯如は石山より紀伊鷲森へ逃れ、信長勢との抗戦の停止を加賀四郡・山内惣庄あてに命じたが、十一月十七日には、勝家は加賀一揆の国人若林長門・宇津呂丹後・坪坂新五郎らを殺害し、その首を安土に送り、さらし首にしている。しかし、これによって越中・加賀の一向一揆が消滅したわけではなかった。

二、神保長住・佐々成政の越中入り

神保長住

神保氏は越中守護畠山氏の守護代をつとめる名家で、放生津に館を構え、神保長誠・慶宗・長職と明応(一四九二〜一五〇一)から元龜(一五七〇〜一五七三)ころまで活躍している。以後、

神保氏の名は越中内ではみえず、家臣あるいは傍系と思われる神保名がみえるのみである。天正六年(一五七八)四月七日の『信長公記』に、「越中神保殿二条御新造へ被召寄」れて、謙信没後の対応として佐々権左衛門長穂を相添えて越中へ入国させたとある。これが神保長住である。佐々長穂は天正二年九月十一日付の直江景綱・河田長親宛信